



Title	カーレン・ブリクセン : 「カーネーションをつけた若い男」にみる文学観
Author(s)	岡田, 令子
Citation	大阪外国語大学学報. 1975, 33, p. 149-160
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80546
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

カーレン・ブリクセン

——「カーネーションをつけた若い男」にみる文学観——

岡 田 令 子

“The Young Man with the Carnation”

— Karen Blixen's Fluid Insight —

Reiko Okada

‘Superficiality is the mark of modern literature, the age lacks weight ; its greatness is hollow.’

In this short essay the authoress' reflexions upon the word 'superficiality' is traced, as it changes from negative conceptions to find the true phase of existence of things, and finally conceives positively and expresses her profound outlook on art and literature as well as on human life.

I

Karen Blixen (1885—1962) の第三の作品集 *Vintereventyr* (冬の物語) が1942年に出版された事は既に述べたが⁽¹⁾, これは彼女が作家生活に入って成功してから, 8年目⁽²⁾のことである。この *Vintereventyr* の中に “DEN UNGE MAND MED NELLIKEN” (カーネーションをつけた若い男) (以下 “Nelliken” とす) が含まれており, 一人の小説家を主人公とした物語となっている。

この作品では, 処女作で一躍有名になった若い小説家が, 次の作品が書けなくなって行き詰まり, どうしたものかと悩んでいるところから話が始まっている。“Nelliken” の主人公は男性であり, まだ30才前であるが, この主人公の苦悩の中に, 作者 Blixen の苦悩の跡を見出し, 又, 彼の文学についての問は, 彼女自身のそれと認めざるを得ないようである。

Blixen 自身, この小説中の主人公と同じように, 自己の体験, すなわち, アフリカの農園での生活⁽³⁾ について, すでに語りつくした感があり, 次に何を語ればよいのかという問題にぶつ

かっていたように思われる。

Blixen の作家としての生活は、いわば、人生の半ばを過ぎてから始まったのであるから、処女作⁽⁴⁾ が世に出た時、彼女は50才に近かった。この“七つのゴシック物語”が出るまでの経過はこゝでは繰返さないが⁽⁵⁾、この最初の作品は、広くヨーロッパからアフリカに亘る地域を舞台として、彼女の想像力を思う存分に駆使した変化に富んだ奇怪な物語が多い。その軽やかな筆の運びでくり広げられる目まぐるしい程の変化に、読者は、Blixen の多様性と究極性のテーマを読み取ることが出来、又、迷路のように交錯した物語の構想に魅惑されたのであった。

第二の成功作 *Den aftikanske farm* (アフリカの農園)(1937) は、はじめの短編集とは対照的に、ノン・フィクションの形を取って、アフリカの原住民たちを個々の人間としてえがき、大自然の中に生きる原地人や、他の大陸からの移民、又、原野に住む動物たちと、作者との交わりを、彼女独特の方法で表現している。ケニアに定住しようとまで決心したこの一女性の鋭くかつ深い洞察力と、デンマーク人ならではのと思われる人間性とをもって書かれた、この当時のアフリカについての記述は、ユニークで新鮮であるばかりでなく、心温まる抒情をも兼ねそなえているのである。

再び短編集という形で出版された *Vintereventyr* は、外的世界の出来事の多様性よりも、むしろ、じみな昔の自国デンマークの歴史や自然の中で、生きるということの意義や、人間の運命、条件について考えたり、又、物を書くという作家としての自己の立場をみつめた内省的な傾向をおびた作品になって来た。

この“Nelliken”の中では、今まで創作力のおもむくまゝに書き続けて来たと思われる Blixen が、この書くということ自体を見据え、自分の今迄たどって来た道を振り返ると共に、これからの進むべき方向ともいえるものに思いをはせつゝ、探求しており、そして、我々はその中に、生とは何かを問い続ける作者をもうかがい知ることになるのである。

そこでこの小論では、Blixen の小説家として、物を書くということの探求の跡をたどり、その文学観を見てゆくことにする。

II

先ずごく簡単に、“NELLIKEN”のあらましをのべてみよう：

或日、ベルギーの港町、アントワープに、英国から一人の小説家が到着する。彼の名はチャーリー (Charlie) といふ、処女作で一躍ヨーロッパ中に有名になったのであるが、人々の羨望をよそに、内には深刻な問題をかゝえているのだった。自分の経験を述べてしまった今、もう言うべき何物も持たず、その上、義父が、自分の作品をも含めて、現代は、‘表面’だけで、重さを欠いているのだと言った批評が気になりだし、自分が空っぽのように思われ、次の作品を書くという自信をすっかりなくしてしまっていた。

妻と落ち合うためホテルへ行き、部屋に入ったが眠れない。夜遅く、ドアをたたく者があるので出てみると、ピンクのカーネーションを胸につけ、盛装した青年が立っていた。チャーリーは、この男の顔に、自分が以前は持っていた、輝くような幸福を見て、もう一度それを取りもどしたいと思い、眠っている妻を置きざりにして旅立つ決心をし、港までやって来る。そこに浮かぶ船を見、船乗り達に会って彼らと話している中に、自分の持っている問題に対する答えを得ていることに気づき、又、妻の元へ帰って行く。しかし、夕べ、妻の部屋と思って訪ねたところが、実は間違っていたのだということがわかり、昨夜のすべての出来事も、神が彼に与えたものであり、神は表面をたゞようことの中に大きな可能性を拓けているのだということを知り、第二の作品が書けるのだという確信と希望と力を取りもどすというものである。

以上が物語の概略であるが、チャーリーが、自分の出会う事件を“Overfladiskhed”という言葉と関係づけ、この言葉を軸にして、物語は進められて行くのである。そこで、この“Overfladiskhed”を中心として、この物語を辿って行くことにする。

今までチャーリーを支えていたものは、彼の燃えるような神への愛に対して、神も彼を他人より愛していただけるのだという信念であった。しかし、芸術家にそなわった偉大な思想、すばらしいインスピレーションや悲劇的な想像力を持たなくなった今の自分であれば、自分は他の人々と同じであり、どうして神に近づいて、助けを乞うことが出来るだろうかと考え、苦しんでおり、その上、いつか義父の言った言葉が思い出され、それが更に悩みの種となる。

“Overfladiskhed er Tidens Særpræg! Vor Tid mangler Vægt, dens Storhed er hul!...”
(s. 27)

(表面だけであることがこの時代の特色なんだ! 我々の時代は重さを欠いている。時代の偉大さはうつろなものだ!)

‘Overfladiskhed’とは、最初にあっては、深みのない、薄っぺらな、上滑りな、浅薄なものとしてだけの内容を持つ、いわば、否定的な意味にしか使われていない。チャーリーが自分は空っぽであると考えるのは、それなりの理由があった。

貧乏な子供のことを書いた作品、これは自分の経験をもとにしたものだが、一たんその作品が成功すると、彼は財産と社会的地位を得て、貧困とは縁のないものになってしまう。もう言うべき何ものも後には残っていないから、彼は空洞と同じ存在だと思う。(p. 28)

ホテルに着くと、案の定、妻は先に来て、眠っていた。ドアには鍵がかかっていなかったのに、チャーリーはそのまま部屋に入り、眠ろうとしたが無駄だった。その内に廊下に足音がして、誰かがドアの取手を廻し、次に静かにノックをしはじめた。チャーリーは妻を起きないようにそっと戸口まで行きドアを開いた。すらりとした美青年が、胸にピンク色のカーネーションをつけ、

あふれるような喜びをかくしきれない表情で立っていた。チャーリーは一瞬恍惚となり、青年をみつめた。(p. 31)

Blixen は、暗い気持でいるチャーリーと、全く対照的に、内に輝くばかりのよるこびをもった若い男を登場させ、さらに、はなやかなピンク色のカーネーションを黒いタキシードを着た男の胸につけさせ、明るく楽しげな、幸福感に満ちみちた人物をえがき出してくる。チャーリーとこの男の関係は、今の彼と、も一人のチャーリー、神が特に自分を愛して下さるという自己への確信をもっていた昔の彼とを象徴的に表現しているとみられる。

For her, forstod han, her var Livets Herlighed, Hensigt og Mening, selve Nøglen til Livet. Den unge Mand med Nelliken havde den i sin Haand. (s. 32)

(ここに、なぜならここには生命の偉大さと、目的と意義が、生命への鍵そのものがあった。それをあのカーネーションをつけた若い男が手の中に持っていた。)

そして、チャーリーは、その男の持っていた自己への確信をもう一度自分のものにしたいと思い、書き置きを残して部屋を出る。彼は船に乗って旅するつもりで、港まで行くのであるが、雨の中をずぶ濡れになって、歩く中に、自分と他の世界との関係が判明してゆくのである。

Først da jeg kom herved, og tav stille i Regnen, blev Tingenes sande Væsen aabenbaret for mig. Fra nu af vil jeg ikke tale, jeg vil høre efter, hvad Søfolkene fortæller mig, de Mennesker, der har hjemme paa de flydende Skibe, og som ikke gaar til Bunds i Tingene. ...” (s. 36)

(私がここへやって来て、雨の中に黙っていると始めて事物の真実の存在が、私に啓示となった。これからは話しをしないでおこう。船乗りたちが話してくれることに耳をかたむけよう。あの海に浮かぶ船を家とし、事物の底をさぐろうとはしない人々の話に聞き入ろう。)

Blixen がよく口にしていたと思われる言葉に、jeg ser paa Livet som en Aabenbaring. (私は人生を一つの啓示としてみています。)という一節があるが、彼女はここでもチャーリーにとって、海とその上に浮かぶ船との在り方を一つの啓示となしたのである。Blixen のえがく物語の主人公たちは、理性と思考を押し進めて、事物の核心へと迫るという操作を避け、他の事物が、ひとりてに主人公に働きかけて来て、その主人公が、今までにない、或いは今までよりもなお一層深い事物の意味を理解するという形をとっている。⁽⁶⁾

さて、チャーリーは港にいる船たちから、一つの伝言をもらうのである。(pp. 35~36)

....de sendte ham et Budskab, men det stod ham ikke med det samme klar, hvad det

var. Lidt efter fandt han Ordet derfor: det var Overfladiskhed. Skibene var overfladiske, deri at de holdt sig paa Overfladen laa deres Magt, og for Skibe er den største Fare just den at gaa til Bunds. De var til og med hule, og Hulheden var deres Væsens Hemmelighed og Gehalt. Dybet trælledede for dem, saa længe de forblev hule. Ved denne Tanke løftede en Lykkefølge Charlies Hjerte, han lo i Mørket. (s. 35-36)

(彼らは何か一つのことを告げようとしていたが、彼〈チャーリー〉はそれが何なのかすぐには解からなかった。少ししてから、彼はそれがわかった。それは‘Overfladiskhed’という語であった。船たちは‘overfladiske’なのだ。それだから表面に浮かぶということの中に力があるのだ。船に取って一番危険なことは底につく、坐礁してしまうことなのだ。船たちは全く、空洞であり、その空であることが彼らの存在の秘密であり本質なのだ。彼らが虚ろである限り、深みは船にかしづいているのだ。こんな考えに至り、チャーリーの胸には幸福感が波のように高まった。彼は闇の中で笑った。) チャーリーは、海に浮かぶ船の在り方は、まさに‘Overfladisk’にとどまり内味の空洞である事だということを認めるのである。

チャーリーは更に、この海の表面に浮かぶ空洞の物体を家として、人生を送っている船乗りたちの言葉に耳をかたむけ、彼らから何かを学びたいものだと思うが、丁度、それらしい人が彼に話しかけて来たのを幸い、その男が酒場へ仲間に出かけに行くというので、一緒に行きたいと申し出る。(p. 37)

仲間は二人だった。そこでチャーリーは、彼ら三人から、彼らが航海中に会った恐ろしい船火事や、嵐や、北海の大吹雪の話聞いた。いずれにしても、三人共、これらの苦しい経験の末、もう二度と海へ出るまいと誓い、海を呪った連中であつたのに、やはり海が好きで、又、船へもどってしまったという。チャーリーは、このような船乗りこそ、本当に海を愛している者たちなのだとわかる。それに反して自分を振り返ってみれば、困難と戦うことなく逃げ出してしまった今の自分が、馬鹿で、いかに子供らしいかということに気づくのである。船乗りたちは、チャーリーに海と人間の本当の関係を教えてくれたばかりでなく、妻や家族への愛情が如何にあるべきかをもチャーリーに分らせてくれた。そして、妻が眠っている間に置きざりにして、出て来てしまった自分を恥ずかしく感じるのである。

“De tre er forstandige Mennesker, og ved, hvad de taler om. Nej, det er rigtige Søfolk, der er blevet knubsede, hundsede og gennemtærskede af Søen, og som har forbandet den og svoret aldrig at se til dens Kant igen, —det er dem, der er Havets virkelige Elskere. Det forholder sig, efter al Rimelighed, ligesaaдан med Ægtemænd og Koner. Jeg vil høre godt efter, og lære Visdom af de Folk her, thi jeg er et Barn og en Daare i Sammenligning med dem.” (s. 40-41)

（この三人は賢明な人たちだ、彼らは何のことを話しているかを心得ている。海に打ちのめされ、いじめつけられ、さんざんたゞきつけられて、海を呪い、もう二度と海を見るまいと心に決めたこともあるのが本当の船乗りで、彼らこそ海の真の恋人なのだ。）

チャーリーは三人の船乗りたちに感謝し、彼らにしてもらった話の返しにと、今度は自分が話し出す。それは、‘En blaa Historie’（一つの青い物語）だと前置きして、話し始める。（pp. 43-47）

その‘一つの青い物語’とは次のようなものである：

『昔一人の年老いた英国貴族が、青磁を集めることに凝って、ペルシャ・中国・日本へと航海したが、いつも娘のエレーナを同伴した。或る時、東支那海で船火事に会い、親子は離ればなれになった。娘のエレーナは水夫の一人に救命ボートで救い出され、9日間彼と一緒に漂流した後、ロッテルダムからの貨物船に助けられて英国の父の元へ帰りついた。父は娘に休養を与えて元の健康を取りもどさせたが、その水夫に百ポンドの金を与えて、再び英国へもどらないように申しつけた。貴族の娘が、ただ一人、水夫と一しょにボートで9日間もいたと言いふらされたら、彼女もつらいだろうと思ったからだった。エレーナはこの親の報告を受けると、すべての他の事柄に興味をなくし、ただ、父と同じように、特別な青い色をした陶器を集めたいという望みだけを持ち、国から国へと航海をして、青磁を集めたのであるが、どうも思う色のものがなかった。父は彼女の求めるものは存在しないのではないかといったが、娘は世界が青かった時の遺品は必ず残っていると信じていた。又、彼女は、我々の地球が、透きとおるシャボン玉のようにエーテルの中に浮いていて、自分は向う側の半球の上を走る船と丁度反対側を走り続けているのであり、最後には、彼女の船が中心へ下りて行き、その時、向う側の船も中心へ来る、そして、二つの船は、丁度真中で出合い一つになるというのである。』

年をとった父は死に、エレーナ自身もすっかり老いて耳も聞こえなくなったが、航海しつづけていた。そんな或る日、古い中国の壺を商人が持って来た。彼女は激しい叫び声をあげ、自分の求めていたものがやっと見つかったことを喜ぶ。彼女は側近の者に、自分はこれで死ぬ。死んだら自分の心臓をこの壺に入れて欲しい、そうすれば、又、昔のようにまわり全体が青くなり、その中で自分の心臓は平和と喜びに満ちて鼓動を打つことができるだろうといい、更に最期の言葉をつけ加えた。“忍耐さえすれば、昔あったものすべてが、又、私たちのところへもどってくると考えることはすばらしいことではありませんか。”

“Er det ikke dejligt at tænke paa, at naar man blot har Taalmodighed, da kommer alt, som engang har været til, atter tilbage til os?” Kort Tid efter døde den gamle Dame. (s. 47)

チャーリーのこの‘一つの青い物語’は多くの事を示唆している。この物語を語り終えたチャー

リーは、ホテルを出てから、今に至るまでの出来事が、どんな意味をもつものであるかを了解しているのである。表面だけで内容がないという事は、彼にとって一つの苦悩であり、彼のかゝる深刻な問題であったが、この‘一つの青い物語’の最後の部分が示すように、‘Overfladiskhed’に更に新しい意味合いをみつけたのである。お互いに引き合って地球の両側を走る二隻の船によって表わされているように、表面を走り続けることによって、二つの船はいつか中心で会うというこの箇所は、表面にあって求め続ける時、事物の表面ばかりではなく、実は、いつか内面、中心にも達することができるという、さらに積極的な意味合いを持たせてきたことは重要である。我々人間も、表面上にただよう事を続けずに、早急に奥底を極め、内面に達しようとする時、それは坐礁をきたすということをも暗に示しているのではないだろうか。空洞であるものが海面に浮かんで、表面に生き続けながら、しかもそれは、海の中の意義あるものとの関係を持ちつづけているのだと知り、‘Overfladiskhed’に対する新しい肯定的な意味あいを見つけているのである。

この青い物語を語り終えて、チャーリーは一人で旅立ってしまうことをやめて、自分を待っているだろう妻の元へと帰って行く。(p. 47) 今まで彼は、妻は自分の名声のために結婚し、理想の男性をでっち上げ、それを自分の中に求めているだけだと思っていたのだったが、今はもう妻が、燈台のような存在に思えて来た。そこで、自分達の部屋へ行こうとするが、妻が昨夜眠った部屋は、チャーリーが訪ねた部屋とは別のものだったことが判明する。チャーリーは部屋を間違えていたのだった。

チャーリーが、落ちついて昨夜の出来事を考え直してみると、それはまるで、自分の作品の中に出て来る出来事のように思われた。(pp. 50-51) その時、妻は彼に、次には恋愛小説を書くのですかと二度まで尋ねるのであった。(p. 52) チャーリーはこの時、あのカーネーションをつけていた若い男が持っていた‘希望と勝利’の喜びを感じ取ることができた。部屋は眩しい程の光に照らされ、彼は神と対話する。神はチャーリーに言われた：“あらゆる浮かぶもの、船を、天体を創造し、彼が浮かび、航海すべき全世界を与えたのに、ホテルの一室でチャーリーはその神と口論しようとする”。

“Hør mig,” sagde Herren, “jeg vil gøre en Pagt mellem dig og mig! Jeg vil ikke maale dig større Ulykker ud, end du netop behøver for at skrive dine Bøger.” (s. 54)

(“いいかい”と神は言われた“私はお前と約束するよ。お前が書くために必要なもの以上の不幸を与えないでおう”)

神はこのように約束したが、さらに、チャーリーに言う。

“Men du skal skrive disse Bøger,” vedblev Gud, “for det er mig, der vil have dem skrevet. Det er ikke Publikum, endnu langt mindre er det Anmelderne, men det er

mig! Mig!” “Kan jeg være sikker paa det?” spurgte Charlie. “Ikke altid,” sagde Herren, “du vil komme til at tvivle paa det iblandt. Men i dette øjeblik siger jeg dig, at saadan er det, og det maa du da holde dig til.” (s. 54)

（“しかし、おまえは本を書かなくてはならぬのだ”，と神は続けられた。“この私が書いて欲しいのだよ。それは、読者でもないし、批評家ではさらさらない。この私なんだ。” “自信を持つことが出来るでしょうか” とチャーリーは尋ねた。“いつもは持てないよ。”と神は答えられた。“時には疑うようになるかも知れない。しかし、こゝでお前に言っておくがそういうものなのだ、そこは辛抱しなくてはならない。”）

作品を書かせるのは読者でもないければ、批評家でもない、神なのだ⁽⁷⁾ とチャーリーは聞かされる。自信を持ち続けることは無理かも知れない、しかし、苦しみながら書かなければならない、ただ書くことあるのみだと彼は了解する。

チャーリーは妻の開けた部屋の窓から町の景色を見下す。そして、昨夜の若い男は今頃どこにいるのだろうか考える。Ah, le pauvre jeune homme à l'œillet!（あゝ、カーネーションをつけたあの気の毒な男よ、)）と考えるところで、‘Nellikén’ の物語全体が終る。(p. 55)

物語の最後の部分は、神とチャーリーの会話になっており、こゝで、作家チャーリーは次の作品が書けるというよろこびを取りもどし、幸福感に満たされるのであるが、それは、あの若い男の顔に自分の失ったものを見て、取りもどしたいと求め続けたものであり、‘一つの青い物語’の中の最後の部分—求めていた青い壺をやっと手に入れたエレナ喜びと、相呼応するものである。

作家チャーリーが、はじめ ‘Overfladiskhed’ に関して、表面的で内容が空であるという否定的な見地に立っていた段階から、海に浮かぶ船から啓示を得て、事物の存在の在り方を見出し、更に深い意味を加え ‘Overfladiskhed’ を肯定するに至る過程があざやかに表がかれているといえるのである。事物の中心一核へと向おうとするならば、それは、ただ表面に、自らは虚ろなものとして、浮かび航海しつづけることにあるのだという、一見矛盾のように思える、この操作をたゆまず、そして痛みを感じつゝやりつづけて行くということの中に、作家の在り方を Blixen は見ているのである。

III

次にこの作品 ‘NELLIKEN’ を書き進めて行く上で、作者が用いた描写の方法の一端をこゝで

取りあげてみよう。

彼女の作品では、常に多くの色彩に関する語が使用されていて、‘NELLIKEN’もその例に漏れないものである。今、物語の中に現われる色彩を拾ってみれば、ピンク色のカーネーション、赤いカーテンのしてある部屋、灰色の町や家と云ったように続く。髪の毛の色も種々の色彩がある。チャーリーが酒場から出てから出会った、街の女は赤い髪、それに、海辺で最初に話しかけて来た船乗りも、彼の話しに出て来たその双生児の娘たちも赤い髪だが、チャーリーの妻は黄色か金髪として描かれ、彼自身は妻よりも濃い色である。眼の色はといえば、彼も妻も青い眼、妻の方がもう少し薄い、赤髪の街の女は茶色の眼をしている。

以上のような色彩で色づけをしているのは、Blixen が絵を描いていた⁽⁸⁾ ところから来るのかどうかは断定できないが、種々の色彩を浮き立たせることによって、絵画的な美しいイメージを読者に与えているのである。さらに、‘NELLIKEN’の中では、青い色、青い世界が、色彩効果以上に内容と密接な関係をもち、一つの意味あいを帯びているように思われる。チャーリーは船乗りたちに物語を聞かせるが、それを‘一つの青い物語’と名づけている。

この物語には blaa (青) という語が10数回も使われている。青い色の陶器(2)特別な青い色(1)青い壺(3)全世界が青かった時(1)濃い青色の影(1)本当の青い色(2)私のまわりが真青になる(1)青い世界の中で(1)といった風で、エレナは、9日間青い世界を漂流したが、本文には出ていない空の色も青かったであろうと読者は容易に想像しうるのである。年老いたエレナは、思い通りの青い壺が手に入った時、6時間もそれをあかず眺め、死んだら壺の中で青い世界に取り囲まれたいと遺言を残して息を引取る。その中で彼女は自由と平和に満たされるのである。このように彼女は水夫と曲折した形で再会し、これが悲愴といわれるのか、グロテスクなのか、或いはロマンチックなのかは読者によって異なるであろうが、とにかく、物語の中では、blaa (青い色彩) が次第に登場人物にもまして、鮮明に浮き出し、物語のテーマそのものになって来るのである。色彩は感覚の領域に属するものであり、それに作者がどのような意味あいを持たせているかを言葉で記述し、繋ぐことは困難であり、無理があるが、少なくとも Blixen の内にあるのは、この色と理想的な魂の状態が結びつけられていることは間違いないようである。エレナの話に見られるように、自分の魂の求めるものゝ実現をはばんでいるすべてのものから脱出し、真実の自分、究極的な自分と一つになった時、その色は青い色なのである。この娘の心臓は遂に真青な世界の中に入り、周囲は水夫と一緒に漂流していた時の状態にもどり、すべては青いわけである。

色彩が色という感覚の領域にとどまるのではなく、他の領域と密接に関係づけられていることは、当時のデンマーク文学にあっては珍しいことであり、或る批評家⁽⁹⁾ はこれがフランスの象徴主義を思わせるものがあることを指摘しているのであるが、Blixen はこの‘NELLIKEN’では感覚と思想を見事に言葉として結晶させ、詩の世界の秩序の高みで‘一つの青い物語’を語らせ

ているのである。

古い彼女の生家、Rungstedlund にセントラルヒーティングをつける折、数ヶ月間、Blixen は秘書の家で過ごすことになった。秘書は自分の家の一室を全部青にしつらえて彼女を迎え入れたという。その後も部屋はそのまゝになっていて、青い壁紙に、窓辺には青いグラスや花びん、壺などを並べ、灰皿は勿論のこと、敷物から家具一式が上品な青色に統一してあったのを、筆者は少し、奇異な感じで眺めたのだったが、この青い部屋にいた作者を想像する時、‘エレナ’嬢を思わせるものがあった。⁽¹⁰⁾

この物語の主人公を男性にしたことも、物語のテーマと無関係ではないように思えるのである。先ず、主人公の名前を Charlie としたことについては、Blixen 自身が Karen Christentze であるからだとも言われている。⁽¹¹⁾ 作家に取って書くということとは何かということは、一番深い奥底の問題であり、やゝもすれば自己の実生活や考えをあからさまに告白し勝ちなものであるが、Blixen は物事の奥底に直接的に関わらないということ—‘Overfladiskhed’ をテーマにしている—のであり、主人公を男性にし、あくまで間接的な形で自己を再構成したのであろう。

Blixen はその七つのゴシック物語とアフリカの農園において、我々の周りで起こる種々の出来事が、一見、自分とは無関係に思えても、実は、深いところですべて究極的な関わりをもってしているということをテーマにしてきたが、この ‘NELLIKEN’ において、小説家と、書くということを対象にして物語を書きつゝ、‘Overfladiskhed’ の問題を扱った。このことも、やはり前から持ち続けてきた多様性と究極性のテーマに通じるものである。‘Overfladiskhed’ という語の意味は、我々の目につく色々の表面的な現象ということであり、我々の日常生活の中におこる小さな色々の出来事とも考えられるから、以前の作品をつらぬく作者の思想が、再び異った対象と形成の中で、再現され、確認されていると思われるのである。

1 昨年(1972)は Blixen が他界して、10年目ということもあって、新聞などに、故人の人となりや仕事をしのぶ記事が人目をひいたのは勿論であるが、最近の書評でも、いわゆる ‘カーレン・ブリクセン・ブーム’ の起っていることを報じている。⁽¹²⁾

Blixen の弟、Thomas Dinesen は二年前に父 Wilhelm についての書を世に出したのであるが、今春さらに、姉 Karen Blixen について、*Tanne, Min søster Karen Blixen* (1974) (ターナ・私の姉 K.B) と題する一冊を出版した。

この書は、Blixen の幼年時代から処女作がアメリカで Book of the Month に選ばれる報を聞いた時点⁽¹³⁾ までを取り扱っているが、その中心は彼女のアフリカ滞在期間(1914—31)である。彼女がその期間、家族へ寄せた手紙からの引用が多く、当時の ‘素顔のブリクセン’ を伝えるのに充分な書である。ここ数ヶ月の間に、この書は第二第三と矢継ぎ早に版を重ね、6月末頃には1万部を突破し、その売行きは、現代の最も人気を集めている流行作家たち⁽¹⁴⁾ を上まわるとのことである。

又、Blixen の秘書として長年、彼女の存命中から死後、今日に至るまで、彼女の作品の翻訳や整理の仕事に当たっている Clara Svendsen も、*Notat om Karen Blixen* (K. B ノート) をこの 9 月出版する運びとなったそうである。さらに、Blixen を中心に集った Heretica 派の、⁽¹⁵⁾ 当時は若い一員であり、現在は第一線で作家活動が続けている Thorkild Bjørnvig 博士も、*Pagten* (協定) と題した Blixen についての回想録を出すことになっていて、本の副題は K. B. との友情について、となっている。

その他、テレビにも彼女についての番組が組まれたり、彼女の第二の作品、*Den afrikanske farm* (アフリカの農園) が手頃な文庫版の中に入れられることになったともいう。

出版界に、現在 ‘カーレン・ブリクセン・ブーム’ が起きているということには種々の要因があることと思われるが、ともかく、彼女の作品が、デンマークの文学界にますます確固とした地位を獲得しようとしていることは疑いのないところである。

IV

Blixen は短編小説という形の中で、小説とは何かという問題を取りあげながら、議論に終らせることなく、彼女独特の象徴や譬喩、それに挿話を非常に巧妙に交えて、自己が真の小説家であるか否かを自己に問いかけることから出発し、この ‘DEN UNGE MAND MED NELLIKEN’ を、小説としても面白く読める作品につくり上げたのである。

幼い頃から彼女は物語をつくっては、姉妹に夜おそくまで語り聞かせて夢中になったり、折あるごとに詩や劇を書いていたのだった。そして、17、8 才の娘時代には、文学というもの、特に、シェクスピア、シェリー、ハイネなどの作品に出会ったのも、デンマークの生んだ大批評家、Georg Brandes (1842—1927) に負うところが大きいと、自ら、弟への手紙の中で述べている。その後、本格的に筆を取って小説を書き出したのは、ケニア高地での農園事業の破産という逆境に立ち向い、人生を再出発するための手段であった。

このような理由で Blixen は再び文学の世界に自分を打込むことになったが、爾後、書くということが、彼女の生きるということと密接にかゝり始め、書く事への情熱が新しく呼び覚まされたのであった。

多くの困難や苦渋に満ちた人生経験の末、‘Overfladiskhed’ の意味を考察し、ついには芸術そのものが、この ‘Overfladiskhed’ の上に成立しているものなのであるという表現を用いて、書くということの芸術を彼女なりに捉え、又、確認しているのが、この ‘カーネーションをつけた若い男’ であると言えよう。

ここに表わされているような Blixen の文学の見方は、リアリズムの傾向をもった当時のデンマークの文学界には受け入れられないものだったが、Heretica 運動に加わった若い作家たちに

示唆するところが多く、彼女の評価は戦後次第に高まり、最近、幅広い読者層や批評家たちの強い関心と興味をひき、現在のデンマーク文学に新しい息吹きを吹き込みつつあるのである。

(1974年 9月)

注

- (1) 外大学報 31. 拙稿‘カーレン・ブリクセン’ 68
- (2) 処女作 *Seven Gothic Tales* は先に英語版で1934年出版された。
- (3) *Den afrikanske farm*, 1937
- (4) *Syv fantastiske fortællinger* 1935. (デ語版)
- (5) Cf. 外大学報 29. 拙稿‘カーレン・ブリクセン’. 222
- (6) 外大学報 31. 78
- (7) Cf. ‘For Tanne var ordene *Gud* og *Skabne* omtrent af samme betydning. *Tanne*.’ 57 (Tanne にとっては、神と運命と言う語はほとんど同じ意味であった。)
- (8) 彼女は幼い時からずっと絵をかき、一時は画家になるつもりであった。 Cf. 拙稿 (5) 223
- (9) Cf. *Langbaum 160 (*アメリカにおける Blixen 研究家)
- (10) 筆者は1972年の夏 Amager の島の S. 家を訪問した。
- (11) Cf. Langbaum 157, デンマークにおける Blixen の研究家 Hans Brix をさす。
- (12) Berlingske Tidende 1974年 6月24日書評欄
- (13) 1934
- (14) Klaus Rifbjerg, (1931—) Anders Bodelsen. (1937—) Ebbe Reich を指す。Cf. Berlingske Tidende (12)
- (15) Heretica movement: Cf. *Titania* 145—158, 雑誌 ‘Heretica’ を1948—1953に出版した。

主な参考文献

- Karen Blixen: *Vintereventyr*, Gyldendal, København, 1966.
Thomas Dinesen: *Tanne, Min søster Karen Blixen*, Gyldendal, København, 1974.
Robert Langbaum: *The Gayety of Vision*, Chatto & Windus, London, 1964.
Parmenia Migel: *Titania, The Biography of Isak Dinesen*, Random House, New York, 1967.
Merete Klenow With: *KAREN BLIXEN, Et Udvalg*, Gyldendal, København, 1964.
Jørgen Gustava Brandt: *Præsentation, 40 Danske Digtere efter Krigen*, Gyldendals Uglebøger, København, 1966.
Mogens Brøndsted og Sven Møller Kristensen: *Danmarks Litteratur fra 1870 til Nutid*, Gyldendals Uglebøger, 38 København, 1974.

新聞記事

1974年 6月27日 “Karen Blixen-bølggen ruller”, Berlingske Tidende, af ‘Tikili’